

障害者も当たり前前生活を



熱い思いを語る佐藤園長

7月の学習会は6日(土)午後1時半より、大阪市立社会福祉センター会議室で行われました。「レスパイトサービス」とのテーマで講演された大和川園長・佐藤宣三郎氏は、役所を辞めて福祉の世界に飛びこまれたそうで、いかにも実践家かつファイトマンという印象を受けました。障害者が人間として当たり前の生活ができるようにとの熱い思いが、話の中にあふつと感じられました。彼らの権利の回復を願って、周りの人たちの意識を変えていきたいとおっしゃる佐藤氏に、頭の下がる思いがします。

地域での自立をめざす レスパイトサービス



佐藤宣三郎氏

すべての人にとって、どこに住んでいる地域で生活する。しかし、社会的弱々な時であっても、自分のことは当然のこととして、者である障害者や老人、特殊な児童にはこの権利は認められず、自分の育ってきた環境から切り離す「収容施設至上主義」がとられてきました。昭和60年頃から「地域福祉」「地域ケア」という考えが打ち出されたものの、施策の中心は相変わらず「入所機能を持つ施設」でした。このように貧しい施策の中で、施設利用者の一痛み

や要求への敏感に反応し「障害者の人権の回復と確立」という観点から、生活の「在り様」が研究されてきました。その中で「地域・在宅生活支援」を支える援助のあり方の一つとして

「レスパイトケア」の実践が始まりました。レスパイトサービスとは、障害児(者)を持つ親・家族を一定の期間、障害児(者)の介護から解放することによって、日頃の心身の疲れを回復の介護から解放され、双方がほっと息づけるように援助することです。私たちも平成3年から「ふれあいの家事業」として取り組み「自宅での生活の連続線上の普通の生活の中で提供し、気軽にサービスが受けられ、障害者本人が主体性をもてるものであること」を旨としてきま

人にやさしい 住いとV



9月21日(土)22日(日)
大阪維新の会
大阪維新の会本部の広場
OBP18号

分科会
住宅改造ボランティア
日時：9月21日
午後5時～午後6時
場所：ナショナルタワー
(ツインタワー北棟)21階
N1会議室
住宅改造には効率主義に偏重し、人にやさしい住まいづくりを求め、喪失してきたことがあります。そこでさまざまなボランティアグループが活躍して

第5回全国ボランティアフェスティバル大阪

います。その連携は不十分です。この機会に参集して実績や問題点を語り合い、今後の発信をともに考えてみませんか。

発言者
水野弘之(京都府立大学、西陣の会)
小堀猛(U工房)
坂井容子(津山市街づくり市民会連合会住宅ネット)



中北 清・画

「とば・コトバ」

アテンダント(attend) 有料介助者、有料介助者などとも訳される。1970年代の初期にアメリカで生まれ、1980年代にわが国にも伝わってきた。障害者の介助はボランティアによってまかなわれる場合が多いが、そうすると障害者の主体性が確保しにくくなってしまふ。なぜなら、ボランティアの善意に依存しているからである。そのため、介助するしない、あるいは介助の内容についての権限は、障害者よりもボランティアの側に留保されることが多い。その点を克服するためにできたのがアテンダントである。

アテンダントは、介助労働に対する対価として賃金を支払うことにより、障害者の側に上記の権限を移そうというのである。ただし、障害者個人でアテンダントを確保することが困難な場合もある。自立生活センター(障害者が主体となって運営し、サービスを提供する機関)が仲介をして確保することもある。これをアテンダントシステムという。わが国でも急速に広がっているが、介助費用をどのようにするかという問題がある。一部の自治体では介助費用を支給しているところもある。

井内ひろ(メソリスト
リム協会副代表
事務局長
当会より杉浦代表・中北



